

共同研究 ● アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究—資源利用と物質文化の時空間比較 (2012-2015)

はじめに

本共同研究は、アジア・オセアニアの海域世界で離散移住を繰り返しながら暮してきた人々を海民と定義し、これら海民社会に特徴的な「ネットワーク社会」の普遍性と地域性を、物質文化と資源利用の様式、ならびにその分布に関する時間と空間双方の面での比較を通じて、人類学的な視点から検討することを目的としている。本共同研究の趣旨やメンバーと各テーマについては、すでに『民博通信』140号において紹介したとおりであるが、ここでは、今年度で2年目となる本共同研究会において発表・議論されてきた主なテーマを紹介しつつ、本共同研究の今後の方向性について整理したい。

海民社会とエスノネットワーク論

エスノネットワーク論は、本共同研究のメンバーでもある秋道智彌（総合地球環境学研究所）が提唱してきた見解であり（e.g. 秋道 1995; 2013）、アジア・オセアニアの海域ネットワーク社会を検討する上で、重要な視点の1つとなる可能性を持っている。そこで2013年7月20日に開催した第3回研究会では、提唱者でもある秋道が、エスノネットワークの定義とその視点から浮かび上がる東南アジア、オセアニアにおける海域ネットワーク社会の特徴に関する試論を発表し、メンバーによる更なる議論を行った。

秋道の定義に従うなら、エスノネットワークを成立させる要素は、「天然資源」と「関係性」にある。すなわち、「天然資源」を獲得し、一定の加工を加えて輸送する物流の過程において、同質の集団から異なった社会階層や民族集団へと広がっていく文化的、経済的な意味を内包する「関係性」が介在してくる。秋道はこうして出現する「関係性」をエスノネットワークとして捉えることで、そこで形成されるネットワーク（あるいは関係性）には等価交換、贈与、互酬性、パ

トロン・クライアント、市場原理、契約といった多様な形があることを指摘する。またその中でも特に注目すべき「関係性」として、オセアニア海域でより明確に認められる「互酬的ネットワーク」と、東南アジア海域で特徴的な「パトロン・クライアント関係」を挙げた。前者は海民と山地民、漁民と農民といった主に2者間における「天然資源」の等価交換や贈与といった形態も含む「関係性」を基本とするネットワークとなる。これに対し、後者は「天然資源」の捕獲者となる集団・個人と購買者となる集団・個人との契約的な「関係性」を基本とするネットワークであり、市場原理がその背後にみられる。

こうしたエスノネットワーク論の視点は、アジア・オセアニアの海域ネットワーク社会を、その社会的「関係性」に着目することで、従来の文化・社会人類学的分析概念で検討し、空間比較できる点において有効性が高い。これに対し、「互酬的ネットワーク」から「パトロン・クライアント関係」への移行は、時間的な変化の結果であり、両者を単純に地域や空間軸のみだけで分けるのは不十分ではという反論も出された。実際、東南アジア海域においても、一見すると「パトロン・クライアント関係」にみえる関係性の中にも、様々な局面でより伝統的とも考えられる「互酬的ネットワーク」的な性格が確認されることもある。たとえば特別講師として発表してもらった辻貴志（国立民族学博物館）によれば、フィリピン諸島のパラワン島南部に暮らす焼畑農耕民であったモロボックは、パラワン島外から新たに移住してきた定住農耕民により土地の多くを失い、現在は焼畑よりも沿岸水産資源の捕獲と販売により生計を立てている。すなわち、彼らは捕獲した貝やその他の水産資源を、定期市にて販売し、その現金収入で主食となる農作物を入手していることになるが、ここでみられるモロボックと定住農耕民との関係性には、「互酬的ネッ



漁獲した魚を畜養業者に販売する海サマの漁師（2002年11月、マレーシア サバ州センボルナ）。



漁撈者より購入した魚を市場で売る陸サマの仲買人（2002年8月、マレーシア サバ州センボルナ）。

トワーク」的要素も否定できない。

一方、「パトロン・クライアント関係」をより拡大解釈し、社会的な上下関係と捉えた場合、主食や現金を提供する定住農耕民と副食の一部となる貝などの水産物を提供するモロボックとの間には、暗黙の上下関係が存在しているとみることにも可能である。同じような可能性はオセアニア海域にも指摘できるほか、現在においてはより経済的な契約や市場原理に基づく「パトロン・クライアント関係」も増えつつある。ただし、同じくこの研究会で鈴木祐記（早稲田大学）によって紹介されたアンダマン海域の海民モーケンと、彼らが捕獲したナマコの購買者である中国系の仲買人との間に認められるような、明らかな社会的上下関係は、秋道（2013）が指摘するようにアジア海域により顕著であることも事実であろう。このようにエスノネットワークを成立させる「関係性」には、共通性と相違性が混合している事例も多いため、単純に「互酬的」や「契約的」などと区別するのではなく、各事例について多角的な比較を行うことで、エスノネットワーク論からのアプローチを深めていく必要がある。

海域ネットワーク社会と八重山諸島

本共同研究の第4回研究会は、2013年11月10・11日に沖縄県の石垣市にて開催した。このうち10日は公開研究会とし、石垣島在住の史家や漁師の方々を招き、情報提供をして頂いたほか、八重山諸島と海域ネットワーク社会をテーマに活発な議論を行った。まず海域ネットワーク社会の事例として、メンバーの長津一史（東洋大学）は東南アジアの海民サマが海産資源の捕獲と販売を目的とし、サンゴ礁という特定の海洋環境に特化した形でその離合集散を繰り返してきた歴史と現在について、最新の事例を含めて紹介した。また飯田卓（国立民族学博物館）は、ヴェズを含むマダガスカル島民が、言語学的には東南アジア海域を起源としている可能性が高いことを指摘した上で、漁民として知られるヴェズの漁具利用に注目し、外来により新たに伝わった漁具がどのようなプロセスを経て普及していくのかという技術的基盤について論じた。さらに特別講師として玉城毅（奈良県立大学）が沖縄のウミンチュ（海人＝漁師）として知られる糸満漁民が、主に明治期以降、漁業活動を目的としてその出身地である沖縄本島から、八重山諸島を含む沖縄の各地へと移住し、新たな移住村落を形成した歴史的過程とその背景について、文献史料と聞き取り調査の成果を中心に報告した。

これに対して公開研究会にご出席頂いた石垣在住の参加者の方々のうち、ウミンチュである池田元氏からは、石垣ウミンチュの移住や漁業の歴史、國吉まこ氏には過去における尖閣諸島での漁業活動の歴史、松田良孝氏には戦前から戦後にかけての先島諸島と台湾の人やモノの往来について紹介して頂いた。こうした新たな情報提供やコメントを受けての総合討論からは、八重山諸島における島民の多くが伝統的に農耕民であり、東南アジアのサマのように魚介類を求めて離散集合するようなネットワーク社会は形成してこなかった一方、台湾や古くは中国圏との往来の歴史が語るように、モノや金を求めて人々が移動や移住を行ってきた過去があることを確認できた。さらに明治以降の近代においては沖縄本島の糸満漁民や、宮古島のウミンチュなど、様々な出身地をもつ人々が魚介類やその他の資源を求め、八重山諸島の島々へと移住

し、現在へと至っている点も無視できない。

ついで11月11日の研究会では、午前中に石垣島内の重要な先史時代遺跡を巡検し、各遺跡の立地や遺物の出土状況を確認した。また午後からは片桐千亜紀（沖縄県立博物館・美術館）が現在も発掘中の白保竿根田原遺跡を含む旧石器時代の状況、島袋綾野（石垣市教育委員会）が新石器時代以降における石垣島の重要遺跡とその研究成果について紹介した。このうち新石器時代期に相当する下田原時代の考古学的状況については、特別講師の山極海嗣（琉球大学）がその詳細について発表し、最後に印東道子（国立民族学博物館）がお隣のミクロネシアの状況として、民族誌時代まで継続されてきた火山島であるヤップ島とその周辺のサンゴ島群との間で資源を交換するサウェイ交易の内容や系譜について紹介した。

これらの議論を踏まえ、八重山諸島の事例に関して印象に残ったのは、八重山では人々が魚介類などの海産資源に強く依存していた痕跡があまり残っておらず、先史時代においてもむしろ内陸資源の重要性が高く、その点においては近現代の状況と一致している点である。しかし、移動性という面では先史時代においても他島産の石材やイノシシ類の利用痕跡などがあり、資源をめぐるネットワーク性は否定できないこと、また島袋によって紹介された過去の津波被害といった自然災害が島嶼環境においては新たな移住要因となりうることも今後の重要な検討課題であろう。第4回研究会は発表者やテーマ数において多様かつ豊富であり、全てについてまだ深く検討するに至っていないが、ここで指摘した課題も含め、今後の研究会で更なる議論を進めていきたい。



八重山諸島の石垣島におけるウミンチュによるハタ養殖（2013年3月、石垣市）。

【参考文献】

秋道智彌 1995『海洋民族学』東京大学出版会。
—— 2013『海に生きる——海人の民族学』東京大学出版会。

おの りんたろう

東海大学海洋学部専任講師。専門は東南アジア・オセアニアの海洋考古学・民族考古学。おもな著作に『海域世界の地域研究：海民と漁撈の民族考古学』（京都大学学術出版会 2011年）、*Pelagic Fishing at 42,000 Years Before the Present and the Maritime Skills of Modern Humans*（共著 *Science* 334, 2011）、*Prehistoric Marine Resource Use in the Indo-Pacific Regions*（共編著 Australian National University E Press 2013）